

平成 28 年度 JERT 主催救急撮影講習会（熊本）参加報告

長崎大学病院 医療技術部 放射線部門 山口友貴

平成 29 年 2 月 26 日に済生会熊本病院で開催された平成 28 年度救急撮影講習会（熊本）を受講しました。今回の講習会の主旨は「平成 28 年熊本地震～繋げていこう、この経験～」ということで、実践に基づいた災害医療の現状を聴講することができました。

はじめに、坂下代表理事より「救急撮影概論と JERT の今後の動向」について基調講演がありました。救急撮影技師認定機構は救急撮影技師認定制度および情報交流事業を通じ、最新の救急放射線技術を高め、普及するための活動を行うことを話されました。また、大きな学術集会だけでなく各地で開催されている研究会やセミナーの重要性を認識し、情報交流事業の 1 つとして研究会やセミナーの案内に力を注いでいるということでした。

講習会の第 1 部は、「救急撮影の基礎」について名古屋第二赤十字病院の大保勇先生と川崎医科大学附属病院の黒住晃先生の講演がありました。大保先生は救急診療概論と安全管理について講演され、傷病者の脊柱軸を保持しながら背面観察を行い素早くバックボードに移動することが可能となるログロールや、骨盤骨折や穿通性異物が残存している等ログロールを行うと二次的損傷を加える可能性が高い時に実施するフラットリフトの方法、さらに外傷患者の保温の重要性についても講演されました。そして黒住先生は救急診療における一般撮影とポータブル撮影について、撮影時のポイントや読影ポイントなどを講演され、救急医療の現場で診療放射線技師に必要な能力は迅速な検査の施行と的確な画像情報の提供を行うことであると話されました。

第 2 部は、平成 28 年熊本地震を経験された 4 名の診療放射線技師の方が、それぞれの施設での対応や課題、知っておきたい災害医療の知識について講演されました。私自身、災害医療については救急撮影ガイドラインで勉強した知識しかなく、災害医療をどこかひとごとのように感じている部分がありました。しかし、実際に震災を経験された先生方の講演を聴講すると、有事の際、私は何ができてどんな動きをとれるのか具体的にイメージすることができず、災害訓練の実施や災害マニュアルの把握、災害発生時の放射線診療の見直しの必要性を感じました。また平時から機器類や棚の固定、備蓄資機材・食料の確保などの備えを行っておくことの重要性、災害時に診療放射線技師として何をしなければならぬか考え、行動手順を徹底する必要性を感じました。そして災害時には、限られた医療物資のなかで最大多数の傷病者に最善を尽くすため、私たち医療従事者自身の身の安全を確保しつつ、患者・被災者の安全確保、避難誘導、診療、救助に当たらねばならないことに気付かされました。

最後に、熊本赤十字病院の山家純一先生の特別講演「熊本地震における熊本赤十字病院の活動について」を聴講しました。先生は災害対応では、時期に応じた方針・人的配置・配分を決めなければならないが、これを決めることの出来る人を複数人準備し、平時から想定、訓練しておくことの必要性

を話されました。方針・配置・配分を決められる人が1人だと、その人が被災に遭った場合や、病院に参集できなかった場合に決定者不在となり非常に困るとのことでした。また災害時において、マニュアルはあくまでも初動指針であり、全てをマニュアル化することはできない。マニュアルの真意を理解し、場面に応じた柔軟な対応が求められることを学びました。これは、先の診療放射線技師の方の講演でも、カルテ運用方法や画像検査の撮影部位、造影 CT 時の同意書・問診票の確認がマニュアル通りできず、見直しの必要性を述べてあり、有事の際には平時では想定しなかったことが起こるため、柔軟な対応が求められることを認識しました。

熊本地震から1年も経たず大変な中、このような講習会を開催して頂きました講習会スタッフの皆様へ感謝申し上げます。熊本の一日も早い復旧・復興をお祈りいたしております。

